



第2図

第30回 IGC 北京大会 T392 祁連山巡検 (1996. 8. 15-21) 報告:

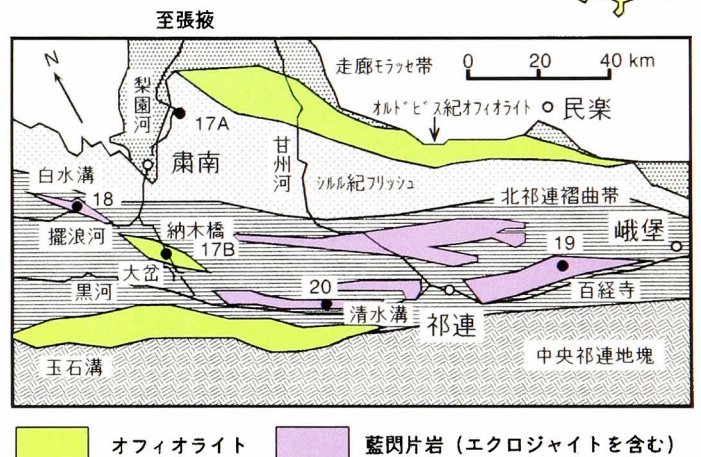
中国甘肅・青海省境，北祁連山脈のオルドビス紀オフィオライト， 藍閃片岩，およびエクロジャイト 石渡 明*

Akira Ishiwatari*: A report of the 30th IGC (Beijing) T392 Field Trip (15-21 Aug. 1996): Ordovician ophiolite, blueschist and eclogite in the North Qilian Mountains along the border between Gansu and Qinghai Provinces, China

1996年9月27日受理.
* 金沢大学理学部地球学科. Department of Earth Sciences, Faculty of Science, Kanazawa University, Kakuma, Kanazawa 920-11, Japan

祁連 (チーレン) 山脈は中国でもオフィオライトと藍閃片岩がよく発達し、それらの研究が進んでいる地域の一つである (従ほか, 1991). 祁連山脈はツァイダム盆地とアラシャン山地 (中朝地塊の西部) の間にある原生代末期からデボン紀にかけての造山帯 (カレドニア期) であり、北から走廊モラッセ帯、北祁連褶曲帯、中央祁連地塊、南祁連褶曲帯に区分される。この巡検では北祁連褶曲帯以北を見た。ここでは古生代前期のオフィオライト、藍閃片岩、花崗岩などが山脈最高部を形成し、その北麓にシルル紀フリッシュ、その北にデボン紀以後の厚いモラッセが分布する (Song, 1996)。オフィオライトは3列をなし、カンブリア紀後期からオルドビス紀後期まで、南から北へ形成年代が若くなる傾向がある (Song, 1996)。このように北へ若くなる地質ユニットの全体的な配列は、ツァイダム地塊の北への衝上 (または中朝地塊の南への沈み込み) による造山運動を暗示するが (王・劉, 1976)、花崗岩の分布などを根拠とする北への沈み込み説もある (肖・王, 1984)。藍閃片岩は南北2帯に分かれて分布し、南側は変成度が高くエクロジャイトを伴い、北側は変成度が低い。変成年代はどちらも 450Ma 前後である (Wu et al., 1993)。

この巡検の詳細および引用文献については、本号末尾のニュース記事を参照されたい。



第1図. 祁連山脈巡検地点とその付近の地質略図 (Song, 1996 に基づき簡略化)。数字はその地点を旅行した日付に対応する。



第2図. 北祁連山脈、甘肅省肅南北方の梨園川左岸の石炭紀石灰岩に見られる、後造山期の南への衝上とそれに伴う横臥褶曲。この場合は衝上断層の上盤側が褶曲している。

第3図. 第2図と同じ。この場合は衝上断層の下盤側が褶曲している。

第3図



第4図. 肅南南方の納木橋オフィオライト上部のボン
ン岩質枕状溶岩. 枕の形から、この溶岩層は明らかに
逆転している(肅南南方大盆大坂峠道沿い、標高3800 m
付近).



第6図. 18日の
帰路、増水で梨
園川を渡れず、
やむなく崖を巻
き橋に出る迂回
路をとり、救援
に駆けつけた人
民解放軍の兵士
や地元民に守ら
れて途中の急流
を徒渉する巡検
参加者.



第5図. 上と同じ枕状溶岩を貫く
平行岩脈群. 北東部(層序的に上
側)の峠道沿いの岩脈群はボン
ン岩質だが、南西部(下側)の峠付
近の岩脈群はN型海嶺玄武岩質で
ある.



第7図. 標高3400mの清水(チン
シュイ)沢に見られるメランジ地
形. 軟弱な珪質泥岩~グレイワッ
ケ砂岩起源の藍閃片岩中に含まれ
るエクロジャイト(まれ)、塊状藍
閃片岩、大理石、石英片岩、蛇紋
岩などの巨大なブロックが、山稜
に突き立っている.